高校生における友人関係と自己肯定感に関する研究

D10-4007　栗田　飛鳥
指導教員　朝倉　隆司

キーワード：高校生、自己肯定感、友人関係

１　緒言

日本の高校生は自己に対する評価が低く、友人関係が希薄であるといわれている。先行研究では、青年期における友人関係は、自己肯定感やその上位次元にある自己概念に影響を及ぼしていると指摘されている。そこで、本研究では、高校生の学校における友人関係のどのような側面が自己肯定感のどの側面と関連があるのかを明らかにする。

２　方法

埼玉県内で協力が得られた高校(1 校)の 1 年生男女 120 名を対象として、2013 年 11 月 25 日～11 月 28 日の期間に自己肯定感と友人関係に関する自記式質問紙調査を行った。調査票の質問項目は、友人関係尺度(岡田、1995)、友人関係測定尺度(吉岡、2001)、学生用ソーシャルサポート尺度(久田・千田・箕口、1989)、自己肯定意識尺度(平石、1990)を基に作成し、基本属性として、性別、年齢、部活動について尋ねた。配布数は 120 枚、回収数は 115 名であり、無回答などのものを除いた 107 名の調査回答を分析の対象とした。男女の割合は男子が 43 名(40.2%)、女子が 64 名(59.8%)であった。

３　結果

全ての尺度得点の平均点を性別、部活動別に t 検定で比較した。自己肯定意識尺度、友人関係尺度、ソーシャルサポート尺度の下位尺度得点のなかには有意な性差がみられるものがあり、自己肯定意識尺度、友人関係尺度の各得点のなかには部活動別による有意差がみられるものがあった。次いで、以上の結果を踏まえて性別と部活動を調整したうえで、自己肯定意識尺度の下位尺度得点それぞれを従属変数とし、友人関係尺度、友人関係測定尺度、ソーシャルサポート尺度の各下位尺度得点との関係を、一般化線形モデルで分析した。その結果、自己肯定意識尺度の「自己受容」得点と「深い関与・関心」得点(B=0.34、p<.05) 、ソーシャルサポート得点(B=0.12、p<.01)、「気遣い」得点、(B=-0.21、p<.05) 、「共通」得点(B=-0.31、p<.05)の間で有意な関連が認められ 、同じく自己肯定意識尺度の「自己実現的態度」得点と「気遣い」得点(B=-0.54、p<.05)の間、また、「充実感」得点とソーシャルサポート得点(B=0.25、p<.05)、「気遣い」得点(B=-0.54、p<.05)の間、さらに「被評価意識・対人緊張」得点と「群れ」得点(B=0.76、p<.05)、「気遣い」得点(B=1.15、p<.001)、「共通」得点(B=-0.74、p<.01) の間に有意な関連があることがわかった。

４　結論

本研究により、高校生における友人関係と自己肯定感には関連があることが示唆された。自己肯定感の対自己領域については「自己受容」、「自己実現的態度」、「充実感」 と友人関係との関連があり、対他者領域については「被評価意識・対人緊張」 と友人関係との間に関連があることが明らかになった。高校生の学校での友人関係は自己肯定感に関わる要素である可能性が示唆され、自己肯定感を育むためには、表面的な仲の良さだけでなく、生徒自身が感じている友人との心的距離感や内面的関わりをもつことへの態度に目を向けていくことが重要になると考えられる。